

文学部のキャリア教育

職業と人文学

2007年度に誕生した キャリア教育科目

「職業と人文学」では、

これまでの5年間、のべ49人のゲストをお迎えし、

職業とキャリアをめぐる貴重な講話をしていただきました。

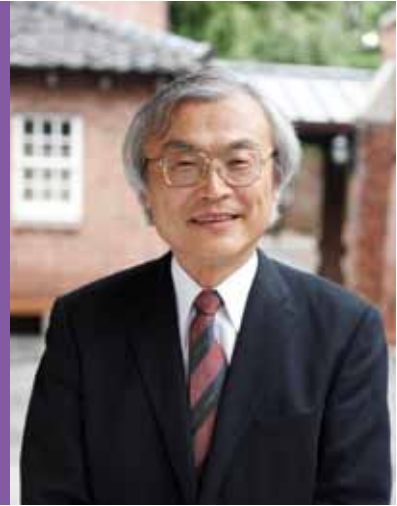
今回、その中から4名のゲストの方々に、

授業を振り返って改めてお話を伺いました。

キャリア教育へも通じる 人文学の力

文学部長

栗田 和明



文学部が考えるキャリア教育

高校生活は大学に入るためにあるのではなく、それ自体で貴重なものです。大学生生活も卒業後の職業生活の準備ではなく、この期間こそが、学び、葛藤し、満足を発見できるかけがいのない時間です。文学部で学んで、学生時代に人生の重要課題と楽しみに目を向けてください。それがじつは私たちが目指すキャリア教育でもあるのです。

人生の重要課題とは、生死、幸不幸、個人と社会、偶然と必然などをあきらかに見るようになることです。これらを思惟し人生を通じて深めていききっかけをつくってください。また、楽しみとは、相手の人やそれらを取り巻く社会に共感できることです。これも一朝一夕にできる課題で

はありません。しかし、これらの大事なことを忘れていかに知識を蓄え、技能を磨き、資格を取ったところで人生構築はすすみません。仏像をつくったあとの入魂が無く、長蛇を逸するようなものです。

「キャリア教育」という言葉にはいくつかの意味があります。就職活動のノウハウの取得も、卒業後の仕事に備えた資格取得の学習も、そこに含まれますが、もっとも大切なのは、一人ひとりの学生に、人間や社会への理解を深め、自分が生きていく道筋を考える手がかりを示すことだと、立教大学文学部は考えています。広く考えれば、大学での活動すべてを広義のキャリア教育の視点から眺めることもできるのです。

「職業と人文学」という授業

文学部では2年生対象の必修科目として「職業と人文学」を設けています。仕事に就いている多くの方々に、人生と仕事を語っていただく授業です。この冊子では、すでに登壇していただいた4名の方に短いインタビューを試みました。授業の中で語られた、人生構築の鍵にな

る発想・姿勢をふり返って、さらに掘り下げて語っていただいています。授業の内容を簡単に要約し再現することはできませんが、このインタビューを読んでもいただければ、「職業と人文学」がどのような科目なのかを理解していただければと思います。

人文学の力

文学部では広い意味での人文学を学びます。人文学では、時代や地域が異なっている人に関心を寄せることもあります。相手の人に接近する方法は、口頭であったり、残された文字・絵画・遺物を通じてであったりします。相手に近づき、やがてその周辺の人びとや社会にまで関心を広げて共感しようとする姿勢が、人文学を学んでいく中で培われます。さらに、相手への理解を土台に、こちらからも発信できる力が獲得できるのです。こうなると、大げさに言えばオールマイティの

力ですね。「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」と表現するとやや物騒ですが、自分自身を含めて人間を深く知ることを目指すところは似ています。

人文学で得るこうした力は人生構築においても大きな力を発揮するはずですが、人文学の学修は、キャリア教育の本質と通じ合っているのです。人文学を深め、良きふるまいと深い思惟をそなえた諸氏が、澎湃と育って豊かな人生を切り開いていくことを期待しています。

01

佐藤 久恵 千代田区職員

ジェネラル、 かつスペシャルで あり続けたい

—公務員の仕事には異動がつきものだと思いますが、その中で、仕事のやりがい、自分の専門的な技量を磨くということ、どのように考えていらっしゃいますか。

公務員は、ジェネラリストであることが求められがちです。短期間での異動は織り込み済み、組織における役割に対して誰が担当になっても機能は変わらないという前提で、組織がつくられてきているのかなという印象です。それに対して個人的に、本当にそうだろうかという思いを持っていました。役割が果たされて問題が起きなければいいと考えるようなところ、プラスの仕事をしたつもりでもあまり関心を持たれないようなところ、少しもの足りなさも感じていました。

人材育成担当への異動をきっかけに、これは自分の専門性となり得るのではという手応えを感じ、8年ほど打ちこみました。組織の中でも、「人材育成にちょっとはまっている人」と、少し変わった立ち位置にいる人と見られているかもしれません。この仕事を通して意識するようになったのは、あくまで現場の仕事を通して職員に知識を身につけてもらい、仕事を学習の機会にするということです。行政組織のなかで人材育成というと、たいていは研修を意味するのですが、実際には研修だけでは人は育ちません。日々の業務を通し、昨日までは福祉だったけれども、明日からまちづくりの担当をします、次は戸籍です、税ですと、新しい仕事について学習することは、公務員の

仕事で大きなウエイトを占めています。

今は人材育成の部署を離れましたが、係長という立場になっているので、日々の業務を通して職員を育てられれば人材育成を担当しなくてもこれまで深めてきた専門性は生かすことができる、という理解をしています。

—組織の中で、いろいろな人と一緒に仕事をしていくことについて、何かアドバイスをいただけますか。

人と一緒にひとつの仕事に取り組む場面では、自分自身の考えや立場を理解できているかが、仕事の成果を左右します。時には自分の意見をはっきり伝えて、意見の相違をお互いに認識することも必要ですが、自分がどういう立場から発言しているかがわかれば着地点を見出しやすくなります。ですが、自分を知る、自己認識というのは、実は一人では難しいのです。私は以前、3年ほどコーチングの養成機関に通ったのですが、そこで仲間から自分について有益な指摘を多く受け、他人とやりとりするなかで自己

認識が深まるのだと痛感しました。

組織の仕事では、自分はできているんだけれども思っているようには評価されないとか、良かれと思ってやっているのに上司から受け入れられない、というような経験をすることもあるでしょう。そういう時には、不満を感じたり傷ついたりするものですが、自分自身の能力を充分とらえきれていない場合もあります。人と意見や評価が違ったら、少し余裕をもってその違いを眺め、一歩引いたところからまわりの意見に耳を傾けることができればいいかなと思います。今、うまくいかないと思っても、人の能力や考え方は、時とともに成長・変化していくものです。将来に向けたある程度長い時間の中で今の自分を捉えるようにすれば、仕事にもよい結果がついてくるのではないのでしょうか。



インタビューー

栗田 和明

教授 史学科超域文化学専修

さとうひさえ 1965年
東京生まれ。大学卒業後、
東京都千代田区に入庁。
出張所、広報、戸籍、人
材育成担当、特別区職員
研修所派遣などを経験。

02

サエキけんぞう

ミュージシャン・作詞家・プロデューサー

仕事は予想もしない
景色を見せてくれる

——サエキさんが登壇された時におっしゃった「予想もしない景色」という言葉は大変印象に残っています。これについて具体的にお話いただけますか。

世間一般では、学生時代は好きなことを好きなだけできる夢の時間のように思われていますが、僕の場合は、歯科医になるための勉強とロックとを両立させていたこともあって、日々時間に追われる生活を送っていました。大学では歯科医の乱立という状況の中での悲観的な見通しを聞かされ、社会に出たらどうになってしまうのかと暗たんたる気持ちにもなっていました。

しかしいざ社会に出て、自分に責任を持って働いている人たちと現場をともにしたときに、ある種の生きがいとか、生きることのリアリティを感じて大きな感銘を受けたんです。世の中には、ありとあらゆるところに仕事が存在していることや、それぞれの仕事には、それに従事している人にしかわからない境地や喜びがあることも、だんだんわかってきました。学生の立場で見ていた世の中と、自分の足で立って初めて見える景色はまったくの別物でした。職場での抜き差しならない人間関係や、仕事上のささやかなトラブル、武勇伝。本物の社会に入ったあとの話というのは、情報としてビビッドで最高のエンターテインメントなんです。

僕が声を大にして言いたいのは、社会に出ることは意外に面白いということです。肝試してみたいなもので、怖いと身構えて俯いて進んだら何も見ないままで終わってしまう。どんな楽しいこ

とが待っているのだろうと前向きな気持ちで飛び込んでみることです。ただし、安易な期待もしてはいけません。学校のように、一定のプロセスに従って努力すれば、それに見合う成績が得られるというようには、未来は約束されていません。

——これから仕事を選んで社会に出て行くとして、学生たちに、仕事を選ぶにあたって、あるいは社会に出た後のことについて、アドバイスをお願いします。

とにかく世の中には、こんな仕事もあるのかと驚くほどの、多種多様な職業が存在します。ですから、まずは情報収集を積極的にしてください。そのとき、インターネットは有力な情報源です。けれども、特定の職業に興味を持ったなら、その仕事の現場をじかに見聞きすることを強くお勧めします。約束を取りつけ、足を運ぶという行為は確かに面倒で勇気が要りますが、パンフレットやホームページの数字やデータに表れない、雰囲気や空気といった、その場でしか得られない情報こそが大事なんです。

仕事の現場から得られる情報を、読み解いて理解する力もとても大事です。せっかく現場に出向いているのに、あら

かじめ得た情報の確認しかできないようでは、あまりにもったいない。文学部の学生のみなさんは、人間に対する深い関心を持ち、作品や資料を読み解く訓練を受けているのですから、そうした情報の理解の面で、大きなアドバンテージがあると思います。

僕の友人に、中小広告代理店に勤めていた人がいます。彼の会社は某巨大広告代理店に吸収合併されてしまった。人員整理がされる中、彼だけは吸収先で大出世を遂げました。なぜか。彼は車について並外れた知識を持っていたんですね。中小の代理店ではまったく生きなかつた知識ですが、そういう一芸に秀でた人材を巨大代理店は欲していたわけです。現実には流動的で、何が起きるかわかりません。そういうときに少数派の面白い人間は意外に強い。そういうことも記憶にとどめておいてほしいと思います。



インタビュアー

加藤 睦

教授 文学科日本文学専修

さえきけんぞう 1958年千葉県生まれ。歯科医師業と並行して、ロック・ミュージシャン、作詞家、音楽プロデューサーとして活動。著作も多く、近著『ロックとメディア社会』(2011年、新泉社刊)により、第24回ミュージックベンクラブ音楽賞(著作出版物部門)を受賞。

03

高坂 勝

Organic Bar 「たまにはTSUKIでも眺めましょ」店主

ダウンシフトして 小さな仕事で 豊かに生きる



こうさかまさる 1970年横浜生まれ。2000年に企業を退社後、世界20カ国を巡り、日本国内も一周。その後、石川県金沢にて料理の職に従事。イラク戦争をきっかけに社会活動を始める。

——以前勤めていた会社を退職された動機、あるいは経緯などをお話いただけますか。

僕はずっと、いい高校、いい大学、いい会社に入れば幸せになれると考えていました。出世してお金をたくさん稼げば、バラ色の人生が開けるものだ。この夢を実現すべく、大学卒業後は、他の企業に先駆け実力主義の昇進を導入していた先進的な小売業の会社に就職しました。

ところが、僕が入社したころバブルがはじけ、企業は何をしても利益を上げられない、右肩下がり時代に入りました。その中で周囲の仲間を蹴落として出世するむなしさ、不必要なものを飾り立てて売る無意味さを感じるようになり、心身ともに疲れ果てていきました。このままでは僕は心の病になってしまうかもしれない。こんな生き方でいいのかと疑問を持ちながら定年まで働き続けるのか。それがだんだんつらくなり、6年目の2000年、会社を辞めました。かいつまんでお話しすれば、そんなところでしょうか。

——会社を退職された高坂さんが、どうしてその後飲食店を営むことになったのでしょうか。

退社してまず考えたのは、自分や仲間が追い求めてきた経済成長のモデルとは何だったのかということでした。世界を一周し、日本各地を旅する中で、今まで関心のなかった政治や社会の問題に自然と目が向くようになったんです。経済成長を求めれば幸せになれるわけではない。逆に求めるからこそ苦しくなる。環境も壊され、「勝ち組」と言われる日本やアメリカなどでも格差社会が生じる。このような展開から脱け出す道は、拡大をやめることだと考えるようになりました。ゆっくりでいい、自分の速度で歩く。減速して初めて目の前にある幸福に気づけるのだと思って、店を始めました。

僕のお店は小さいです。お客さんにたくさん来てもらおうという努力もしていません。それでも毎日が幸せで楽しいのは、心に余裕を持って生きられるからです。目の前のお客さんに真心のもてなしをし、空いた時間でお米を作ったり、社会活動を試みたり。人とのつながりを持って、自分の食べる物さえ確保できたら、お金なんてそこそこでも満ち足りた生活は送れるんですね。

——多くの学生は、企業に就職すること

を希望していると思います。高坂さんの授業を聞いて、かなりのカルチャーショックを受けた受講生もいたようです。今改めて、学生たちにメッセージがあればお聞かせください。

今から50年前の社会は、半分が勤め人、半分は自営業。それでも社会は何の問題もなく健全でした。ですから、企業に属して生きることは、決して自明のことではないんですね。もちろん就職を否定するわけではありません。自分に合った会社で働ければ、そこで得られるものも多いでしょう。でも、将来もしも体調をくずしたり心がつらくなったときに、会社を辞め、ダウンシフトして、自分の好きな小さな仕事で生きていく方法もあることを、思い出してください。自分の意思で世の中を生き抜いていけるほうが楽しいし、スリリングだと思うので、ぜひお勧めしたいと思います。



インタビュアー

湯本 浩之

准教授 文学科日本文学専修

きくちひろこ 1972年東京生まれ。コミュニティ・エンゲージメント戦略、ワークショップやプロジェクト開発の経験を生かし、コミュニティづくり・デザイン・マネージメント活動を行っている。

04 菊池 宏子

日米クリエイティブ・エコロジー社代表
コミュニティデザイナー

はかないことを 可視化する

—菊池さんは高校卒業後、アメリカの大学に留学して、それから就職をしましたね。12年間、アメリカを拠点にお仕事をされていていらっしゃいますが、最初の仕事との出会いは、どんなことがきっかけでしたか。

きっかけは、オノ・ヨーコさんでした。タフツ大学の大学院に在学中、研究の素材としてアジアの芸術家を紹介してほしいと担当教官に頼んだところ、ジョン・レノンの妻として有名な作家のオノ・ヨーコを調べてごらんと言われたんです。彼女の活動をたどるうちにすっかりファンになってしまって。いつか会いたいと思っていた矢先、マサチューセッツ工科大学リストビジュアルアーツセンターで彼女の回顧展が開催されることを知りました。そちらにインターンとして採用されたのが大学院の終わり、2000年でした。当時センターでは新しい役職をつ

くったばかりで、それが本当にタイミングよく、私がしたいと思っていた、アートと地域の融合ということに合致したんです。インターンシップは半年の予定でしたが、続けてみないかと打診を受け、そのままセンターで働くことになりました。

6年ほどたったころ、ボストン美術館からお声が掛かりました。「社会とアートを結びつける新しい部署を立ち上げるにあたり、専門家を探している。あなたの経験を生かしてみないか」と。ボストン美術館では主にプログラム開発の仕事をし、時に附属の大学で教鞭を執るという経験もさせていただきました。

—コミュニティデザインの仕事をすることで、菊池さんが一番大切にしていることは、どんなことですか。

すごく見えにくいけれども実は重要な

ものというものを、いかに表面化させてあげるかということを大切にしながら、仕事をしています。人と人とがつながるきっかけや、町ができあがっていくヒントというのは、すごく小さいなところに隠れているので、それを上手に見極め、あるいは、それを上手に形にしていく。私はそれを、はかないものを可視化してあげるというふうに言っているのですが、そういうすごく細かい作業をやるというのが自分の仕事かな、と考えています。

隠れている・秘めているものを形にしていく際には、多様性を尊重することも大切だと思います。考え方や価値観の違いというものもきちんと尊重して、エンゲージする、つなげていく、そういうことを続けていく中から、生まれ成長していくコミュニティこそが、自分たちにとって住み心地のよい環境になるのではないのでしょうか。意識的に人とつながりたいとか、自分は世の中の一員なんだという感覚を、みんなが得られるようなエンゲージメント、環境づくり、を目指しています。

—今の学生たちに何かメッセージがあるとしたら、どんなことがありますか。

海外に出て仕事をするとは想像もしていなかったという意味では、仕事との出会いに運命的なものを感じます。一方で、自分のしたいことを強く持ち、常にそのためのアクションをとり続けていった結果、今があると思っています。大切なのは、簡単にノーと言わないこと。自分の感性を信じ、発揮することを恐れてはいけません。若いうちは頭も柔軟ですし、体力があるんですから、多少の無理は進んで受けなければ。ノーと言った瞬間に、チャンスは逃げてしまいますよ。



インタビュアー

市川 照仔

コオプ・コーディネーター

「職業と人文学」

ゲストスピーカー一覧

(50音順、所属・肩書は当時のもの)

2007年度

市川 照仔／金沢大学広報戦略室長
伊藤 正明／㈱ベネッセコーポレーション
北村 節子／読売新聞東京本社論説委員
玄田 有史／東京大学社会科学研究所教授
小島 貴子／立教大学ビジネスデザイン研究科特任准教授、コオプ・コーディネーター
斉藤 幸夫／㈱メディアファクトリー
田口 久美子／㈱ジュンク堂書店
中川 慎一／富士ゼロックス㈱
柳 太呂央／㈱文芸春秋
吉山 勇樹／㈱ヒューマンデザインオーソリティー

2008年度

市川 照仔／立教大学コオプ教育・インターンシップオフィス コオプ・コーディネーター
伊藤 正明／㈱ベネッセコーポレーション
伊藤 みどり／元フィギュアスケート選手
熊坂 出／映画監督
小島 貴子／立教大学ビジネスデザイン研究科特任准教授、コオプ・コーディネーター
島田 雅彦／㈱クリップ
武田 知也／NPO法人 アートネットワーク・ジャパン
常井 健一／朝日新聞出版「AERA」編集長
中川 慎一／富士ゼロックス㈱
星 寛次／たかはた共生塾・農民詩人・有機農業家
山本 繁／NPO法人 コトバノアトリエ
吉山 勇樹／㈱ヒューマンデザインオーソリティー

2009年度

秋山 晶／コピーライター
磯崎 憲一郎／作家
尾木 和晴／朝日新聞出版「AERA」編集長
高坂 勝／Organic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」店主
小島 貴子／立教大学ビジネスデザイン研究科特任准教授、コオプ・コーディネーター
サエキ けんぞう／ミュージシャン・作詞家・プロデューサー
佐藤 一宏／立教大学学生部
佐藤 久恵／千代田区役所
松島 理恵／立教大学チャブレン室事務課

2010年度

尾木 和晴／朝日新聞出版「AERA」編集長
小倉 聖子／映画宣伝パブリシスト
高坂 勝／Organic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」店主
小島 貴子／立教大学ビジネスデザイン研究科特任准教授、コオプ・コーディネーター
佐藤 一宏／立教大学学生部
佐藤 久恵／特別区職員研修所
サエキ けんぞう／ミュージシャン・作詞家・プロデューサー
長谷川 華／編集者
森 高一／環境プロデューサー

2011年度

荒井 英恵／助産師
石田 涼太郎／NHK「クローズアップ現代」ディレクター
菊池 宏子／コミュニティデザイナー
佐藤 久恵／特別区職員研修所
サエキ けんぞう／ミュージシャン・作詞家・プロデューサー
長沢 恵美子／日本経団連事業サービス
中村 健太／仕事を知る見るつくる人・東京仕事百貨代表
西澤 朋泰／立教大学キャリアセンター
猫沢 エミ／ミュージシャン・Bonzour Japon 編集長



立教大学

文学部

文学部のキャリア教育「職業と人文学」

発行日：2012年8月1日

企画・編集：立教大学文学部 <http://www.rikkyo.ac.jp/bun/>

発行：立教大学 <http://www.rikkyo.ac.jp/>